

デイトナハウスの新提案
『ロード建築』という考え方

性能や間取りだけではなく、これからの建築は語れません。家とガレージ、クルマと旅、都市とローカルをつなぎ、人の移動や出会いまでをデザインしていく。建物を終着点ではなく、次の行き先を生み出す起点として捉え直す。デイトナハウスがこれまで育ててきた思想を、新たな建築概念として示したものの。それが「ロード建築」です。

家は、もう一つだけじゃなくていい

平日は都市で働き、週末は海の近くで過ごす。ふと思いついて山のガレージまでクルマを走らせ、旅先で仕事をし、知らない町でいつもの道具を広げる。そんな暮らしを想像してみてください。一つの場所にすべてを集めるより、いくつもの場所に自分の行き先がある方が、暮らしは面白くなるのではないのでしょうか。

自宅とは別に、愛車で向かえる場所がある。仲間や家族と時間を過ごし、道具を置き、その土地の空気に触れる。そんな拠点がいくつもあることで、暮らしは少し自由になります。

もちろん、そのすべてを所有する必要はありません。自分で持つ場所があってもいいですし、借りる場所でも、仲間と分かち合う場所でもいい。必要なときだけ訪れる場所でもいいのです。

建築は、ただそこに住むためだけのものではありません。人を外へと連れ出し、暮らしの行動範囲を広げ、新しい出会いや経験を生み出すための拠点にもなり得ます。

デイトナハウスはこれまで、ガレージという文化を起点に、建築とクルマ、趣味、仲間、地域をつなぐ試みを続けてきました。私たちは、その歩みの延長線上にある建築を、単独で

完結する「点」ではなく、人の移動や出会い、地域とのつながりの中にある「拠点」として捉え、新たに「ロード建築」と定義します。

暮らしは、少しずつ移動し始めている

なぜ今、そのような暮らしが現実になり始めているのでしょうか。働く場所の自由度が高まり、多拠点居住のサービスが生まれ、所有せずにご利用できる場所も増えました。交通網や通信環境の進化によって、都市と地方を行き来することも、以前ほど特別な行為ではありません。

かつて二つ目の拠点といえば、限られた人が所有する別荘でした。し

かし今は、月単位で借りる住まいや、仲間と共有する場所、各地を移動しながら利用する拠点も生まれています。

大切なのは、必要に迫られて

移動するのではなく、自分の意思で行き先を選ぶことです。どこで過ごし、誰と会い、何をするのか。移動そのものが、暮らしを組み立てる方法になり始めています。

人類の歴史を長い目で見れば、移動する暮らしは決して新しくありません。遊動しながら暮らし続けた時間は、定住してきた時間よりもはるかに長いのです。移動したいという欲求そのものは、昔も今も大きく変わっていないのかもしれない。変わったのは、その速度と範囲、そして移動を支えるネットワークです。では、その変化を、建築はどのように受け止めるのでしょうか。この連載で考えてみたいのは、その問いです。

モノへの愛は、経験への入口になる

人は昔から、持ち物によって自分

建築の価値は、つながりの中で育つ

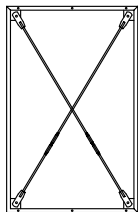
建築は長い間、完成した瞬間に価値が決まるものだと考えられてきました。美しい外観、合理的な間取り、優れた素材、高い施工精度。もちろん、それらは今でも重要です。しかし、これからの建築の価値は、それだけでは決まりません。そこに誰が訪れ、どのような時間が生まれ、地域や他の拠点とどうつながるのか。建物が使われ始めてから生まれる出来事や関係性も、その価値を育てていきます。

ロード建築では、一棟の建物を単独で完結するものとは考えません。人や経験が交わり、別の拠点や地域へとつながる結節点として位置づけられます。建築に求められるのは、建物単独の完成度だけではなく、使われながら価値を育てていく力なのです。

ロード建築という発想

では、ここでも「ロード」とは、何を指すのでしょうか。ロードとは、単なる道路のことではありません。人が移動し、文化が移動し、情報が移動し、経験や価値観が運ばれていく。その流れをつなぐネットワークです。ロード建築で捉えるのは、建物そのものだけではなく、その建物を中心とした、どのような移動が生まれ、どのような出会いや関係性が広がっていくのか。その先に生まれる動きまでを含めて考えます。

『イージー・ライダー』『パニング・ポインツ』『バリ、テキサス』などのロードムービーは、ロードを進む旅を通して、自由や孤独、自己発見を描き、「定住」「幸福」という価値観を揺さぶり



What's DAYTONA HOUSE×LDK ?

デイトナハウス×LDKの建築システムを構成するのが、軽量鉄骨のLGSパネルです。板厚3mm～4mm、幅12.5cmの「Cチャンネル」と呼ばれる部材を、横幅182cm、縦270cmの長方形に溶接して製作。デイトナハウス×LDKでは、この基本パネルを連結することで、住宅やガレージハウスだけでなく、別荘、店舗、賃貸住宅など、さまざまな用途の建築へ展開していきます。パウダーコーティングを施した鉄の素材感と、構造を支える「ブレース」が生み出す、インダストリアルで飽きのこない空間のテイストも、大きな特徴となっています。

LDK inc.
代表
五田敦士

デイトナをはじめ、カーマガジンでの長期連載、ムック本であるCAR&HOMEにて、常にクルマと住宅の関係について提案し続けてきた建築プロデュース会社LDK inc. 建築設計はもちろんのこと、建築システムの開発や商品開発も行う。

www.daytona-house.com



み出す相棒でもあります。

大切なのは、買いか借りのかとうの違いではありません。何を待つではなく、それを使って何をし、誰と時間を過ごすのか。モノの価値は、その先に生まれる経験まで含めて考えるべきものになっています。

では、モノと経験をつなぐ建築とは、どのようなものなのでしょうか。その

最も身近な答えが、ガレージです。

ガレージは、最初のノードである

ガレージには、日常の延長にありながら、次の移動へと気持ちを切り替える時間があります。愛車を整え、道具を広げ、仲間と次の行き先を語り合う。旅から戻れば荷物を広げ、次はどこへ向かうかを考える。そこに

は、住居のほかの部屋とは少し異なる時間が流れています。

家とロード、個人と仲間、モノと経験、日常と旅が、ここでもつながっていくのです。ガレージは、家の中にありながら、最も外の世界に近い場所でもあります。

つまりガレージは、ロード建築における最初のノードです。

ました。私もまた、そのロードムービーに揺さぶられた一人です。移動することが、自分自身を発見することにつながっていく。その感覚にあやかっつて、この新しい建築観を「ロード建築」と名づけました。

ただし、ロード建築が目指すのは、定住を否定し、当てのない放浪を続けることではありません。帰る場所を持ちながら、ときには別の拠点へ向かい、その土地の人や文化と出会う。定住と放浪の間に、暮らしの新しい選択肢をつくることです。

そして、ロードの先には必ずロードムービーがあります。その土地にしかない風景、食、店、仕事、人の営み、季節、時間の流れ。ロードを走る楽しさは、その先にあるローカルとの出会いによって、さらに深くなります。

ロード建築は、場所と場所だけでなく、移動する人と、その土地固有の文化をつなぎます。ロードとローカル。その二つが出会う場所に、新しい建築の価値が生まれます。

ロードの魅力は、目的地だけにあり、移動する人、途中で立ち寄った店、偶然交わした会話、予定になかった風景が、旅を自分だけのものにしていきます。ロード建築は、そうした偶然を受け止め、次の行き先へつなぐ余白を持つ建築でもあります。訪れる人によって新しい物語が生まれていくことも、その価値の一つです。

建築事業と建築ブランドの違い

建築事業は、建物を正確に設計し、適正に施工し、予定された品質で引き渡します。それは、建築において最

私たちがつくりたいのは、同じ形の建物だけではありません。ロードとガレージを起点に、人と土地、移動と暮らしをつなぐ、一つの建築文化なのです。

ROAD STAYという使い方

ロード建築という考え方に立てば、建築は「住む」だけのものではなく、準備し、語り合い、地域文化を体験する。私はその具体的な利用形態の一つを「ROAD STAY」と呼びたいと考えています。

旅の途中で立ち寄れるガレージ付きの拠点。クルマやバイクと一緒に滞在できる場所。仕事や趣味を楽しむ、地域の文化に触れる。ただ泊まるだけではなく、そこから何かが始まる拠点です。

全国に展開している賃貸ガレージハウス「GLB」には、すでにロード建築の原型があります。ガレージからロードへ出て、地域と出会い、再び拠点へ戻ってくる。将来的には、契約や管理の仕組みを整えたうえで、仲間と一つの拠点を共有する使い方も考えられます。これもまた、ロード建築の一つの可能性です。

ROAD STAYは、単なる宿泊事業でも、既存のGLBをそのまま転用するものでもありません。GLBで培ってきたガレージ空間の思想や建築技術、運営の経験を、「滞在」という新しい形へ発展させる試みです。

さらに、必要な制度や運営体制が整った拠点では、同じ価値観を持つ人が、各地の拠点を利用できる仕組みも考えられます。ただし、大切なク

ルマや工具のある場所をどのように開くかは、所有者や利用者の意思を尊重しながら、丁寧に設計していく必要があります。

ROAD STAYが目指すのは、泊まることそのものではなく、そこを起点に次の経験が生まれることです。旅人が地域を面白くする

ロード建築は、定住する人だけを主人公にしていません。人が訪れ、滞在し、地域と出会い、また別の土地へ向かう。その循環によって、建築は文化を媒介する存在になります。

民俗学者・折口信夫は、共同体の外から訪れ、新しい力をもたらす存在を「まれびと」と呼びました。現代の旅人と同じものではありませんが、外から訪れる者が地域に刺激をもたらし、新しい関係や文化を生み出すという発想には、現代にも通じるものがあります。外から人が訪れ、刺激が入り、交流が生まれることで、地域文化は更新されていくのです。

ただし、外から訪れる人が、いつでもそのまま歓迎されるわけではなく、地域には地域の暮らしがあり、それを尊重する姿勢が必要で、また、拠点を運営する人が地域と顔の見える関係を育てていくことで、旅人は単なる通りすがりではなく、迎え入れられる存在になっていきます。人の移動が地域を面白くし、地域との出会いが旅を深くする。その間を取り持つ場所として、建築があるのです。

ロード建築がひろくもの

20世紀の建築は、主として「所有



高床式の構造を活かしたTYPE-Fは、ロード建築の思想を表現するのにふさわしいモデルです。このCGは、小淵沢の田園越しに霊峰富士を望む風景をイメージしたもの。こうした土地に「田んぼレストラン」を建て、地域の風景や食文化を楽しめる場所として運営することも、デイトナハウスが描く夢の一つです。メインメニューは、もちろん地元のお米でつくる絶品のおにぎりです。

れ、つながっていきます。建築は、誰かの持ち物である前に、誰かの行き先になっていきます。

一人ですべての拠点、仲間と共有するGLB、地域と出会うTYPE Fや田んぼレストラン、そして、各地の拠点をつなぎ、滞在のネットワークへと育てるROAD STAY。ロード建築に、あらかじめ決められた形はありません。

もちろん、その実現には多くの課題があります。制度の整理、運営の仕組み、地域との信頼づくり。どれも、一朝一夕に片づく話ではありません。そんな中でも、デイトナハウスは、この構想に挑みたいと考えています。課題を一つ乗り越えるたびに、建築の新しい楽しみ方が見えてくる。私たちは、そう信じています。

自由とは、あらかじめ誰かから与えられるものではなく、自分の行き先を選びながら、一人ひとりがつづけていくものなのかもしれません。どこで過ごすか。誰と時間を共有するか。どの土地へ向かい、どこへ戻るのか。そうした選択の積み重ねが、その人らしい暮らしをつづけていきます。

建てて終わりではなく、使いながら育てる楽しみ。一つの場所に縛られず、ロードの上へ暮らしを広げていく楽しみ。その楽しみを、この連載で、読者の皆さんとともに探していきたいと思っています。

家は、もう一つだけじゃなくいい。建築は、もっと自由でいい。そして、暮らしはもっと移動していい。

ロード建築は、完成した思想ではありません。まだ、走り出したばかりの道なのです。

ロード建築の価値

01 暮らしの自由度が広がる

いくつもの行き先を持つことで、暮らしはもっと自由に、面白くなる。

02 モノへの愛が経験を生む

モノは自己表現であると同時に、経験への入口になる。

03 地域と人をつなぐ

外から人が訪れ、地域が活性化し、文化が更新される。

04 建築の価値が育つ

完成後の時間や関係性の中で、建築の価値は育っていく。



自然の中の拠点
山・湖・海など、自然に寄り添う滞在型

TYPE-F/田んぼレストラン

地域の風景や文化を活かし、交流を生む



GLB (ガレージハウス)

ノード(結節点)=GLB

ガレージを中心に、暮らし・趣味・仕事・交流が交わる拠点。ロード建築における最初のノード。



ROAD STAY 拠点
旅の途中で立ち寄り、地域と出会う



別荘・セカンドハウス
週末や長期滞在で創造性を高める



都市の拠点
都市の中で趣味・仕事・交流を楽しむ



お店・オフィス・工房
働く・つくる・発信する拠点

ノードとロードの連鎖が

豊かな暮らしと地域文化を育てる

ロード建築がひろくもの

行き先が増える
いつもの場所とは別に、行きたい場所が増える。

出会いが増える
地域の人や旅人と出会い、つながりが生まれる。

体験が深まる
その土地の文化や自然を体験する機会が広がる。

拠点と文化が育つ
使われ、語られ、未来へ受け継がれる。

自由な暮らしの実現へ
定住と放浪の間に、新しい暮らしの選択肢をつくる。

も基本的に重要な仕事です。一方、建築ブランドは、「なぜ、この建築をつくるのか」という問いを持ち、その思想を建築として表現します。

ブランドとは、ロゴや広告、格好のよい名前のことではありません。思想を発信し、共感する人と出会い、建築を実現し、完成後の時間まで共有する。そうして育つ関係性そのものです。

ステイブ・ジョブズは、Appleをテクノロジとリベラルアーツが交差する場所に位置づけました。デイトナハウスもまた、鉄骨や建築システムという技術と、クルマ、ガレージ、遊び、旅、地域という文化が交差する場所にあります。デイトナハウスは、建物をつくるだけでなく、その先に生まれる関係性まで育てていく建築ブランドです。だからこそ、ロード建築という考え方を実践できるのです。

デイトナハウスが歩んできた道

デイトナハウスは、最初から「ロード建築」という言葉を掲げてきたわけではありません。しかし、振り返ってみると、その歩みはロード建築の考え方に近いものでした。デイトナハウスが大切にしてきたのは、建物の形だけではなく、そこでどのような時間を過ごすかということでした。ガレージを中心に趣味と日常をつなぎ、都市、海辺、山、湖畔など、それぞれの土地の自然や景観と調和しながら、暮らしの楽しみを広げることです。

鉄骨という構造も、その一つです。鉄骨は、単なる工業的な素材ではあ

りません。余計な装飾に頼らず、構造そのものを見せることで、空間に清潔さと自由度を生み出すための表現でもあります。そして、システム化された鉄骨は、都市の一角でも、海辺でも、山あいでも、場所を問わず一定の品質と施工性で建てることができます。どのような土地にも、同じ思想を持つ拠点を送り出すことができる。そのためのシャシーのような役割を、デイトナハウスの鉄骨システムは担ってきました。

ガレージ、鉄骨、クルマ、旅、自然、地域。そうした要素を一つの世界観としてつなぎ、全国へ広げてきました。

例えば、高床式の構成を活かした「田んぼレストラン」や、風光明媚な場所に建てるTYPE Fも、その延長線上にあります。土地の風景を壊さず、少し高い視点から眺めや空気を取り込み、地域の食や店、自然へと人の行動を広げていく。ロードの先にある土地の価値を、建築によって体験へ変える試みです。

雑誌「Daytona」や「世田谷ベール」が長年育ててきた、クルマやバイクとともに走り、遊び、暮らす文化。そこに、ガレージという空間、鉄骨という技術、そして全国の加盟店ネットワークが重なっていることが、デイトナハウスの大きな強みです。ロード建築は、社会の変化に合わせて突然つくられた言葉ではありません。デイトナハウスが長年実践してきたことに、ようやく名前が付いたものなのです。それは、クルマやバイクを通じて移動し、土地と出会い、仲間と時間を共有する文化を、建築という形で社会に実装する試みでもあります。